

こすげ冒険学校の小史

黒澤友彦 NPO 法人自然文化誌研究会

A Historical Sketch of Kosuge Adventure School

Tomohiko KUROSAWA, The Institute of Natural and Cultural History

はじめに：「こすげ冒険学校」開催の経緯

東京学芸大学公開講座「子どものための冒険学校」、「ぬくい少年少女農学校」を経て、「ちえのわ農学校」の設立・開催に至った。主催は「サークルちえのわ」という東京学芸大学の公認サークルである。

自然文化誌研究会は、2004 年に東京都認証の NPO 法人になり、山梨県北都留郡小菅村に新たなフィールドを求め、拠点となる古民家を借りた。小菅村で本格的に活動を行うため、事務局も小菅村に移動した。

農学校の流れは、「サークルちえのわ」が継承し、自然文化誌研究会は「子どものための冒険学校」の流れを継承し、環境学習・野外教育を主とする「冒険学校」を継承していくこととなった。

2. はじまり～「冒険学校まふゆのキャンプ」

2004 年 5 月より、小菅村に拠点となる古民家を借りて事務局機能も小菅村に移転した。小菅村での当初の主催事業は、雑穀栽培講習会を開催し、雑穀の普及啓発を目指した。

小菅村で「冒険学校」の流れを汲む事業を開催したのは、2004 年 12 月。「冒険学校まふゆのキャンプ」という名称で開催。会場は小菅村内の玉川

キャンプ場で、その頃は今よりも寒く、冬のキャンプも流行っていなかった時代なので、冬になると小菅村のキャンプ場は閉鎖していた。キャンプ場の方に趣旨を理解していただき、2泊3日で開催した。本会としては小菅村で最初の冒険学校、それが真冬であったため、小菅村の人達からは相当な物好き集団と思われていた笑い話を耳にしたこともある。

「冒険学校まふゆのキャンプ」については、2022 年も主催事業として継続開催することができた。名称の発端は、寒さを活かして、寒さに向き合っ（工夫し）、「耐寒・体感」というコンセプトであった。参加者はスキーウェアを着て、焚火に集まり、鳥をさばくプログラム（参加は事前に保護者と確認）を実施したり、少し尖がっていたかな・・・と思ひ返す。多摩川キャンプ村では3年間実施した。

事務局の思い出：（「子どものための冒険学校」を開催していない期間だったので、ハードな内容を模索していたのだと思います。当時、中心メンバーであったあべちゃん（井村礼恵さん）とたくさん話し合いました。）



図 1. 冒険学校まふゆのキャンプ

小菅村に来る前にこの時期に開催していたのは「クリスマスキャンプ」という名称の2泊3日。



開催場所は東京都檜原村のフォレストイングコテージで寝泊りは暖かく、サンタクロースがプレ

ゼントを担いで現れ、コマ回し等のお正月遊びをするという、ゆる〜い雰囲気のカンパであった。しかしながら中日にはきっちりとしたプログラムがあり、林業家の田中惣次さんに講師をしていただき森林整備体験（間伐体験）を行っていた。

事務局の思い出：（「クリスマスキャンプ」自体は、夏に大滝村で開催していた「子どものための冒険学校」が本気だったので、あえて緩めに設定していたのだと思います）

2. 「冒険学校むらまつりキャンプ」

以前、ゴールデンウィークには「新緑キャンプ」という名称でキャンプを行っており、2000年頃は大滝村がフィールドであった。

小菅村では5/3〜5/5に「冒険学校むらまつりキャンプ」という名称で開催した。

小菅村ではゴールデンウィークの5/4に村を挙げて開催する「多摩源流まつり」がある。コロナ禍前の2019年までに32年間継続してきたイベン

トである。そのお祭りに参加・協力することで地域の方とのかかわり、地域文化を学ぶことを目的とした冒険学校とした。

「多摩源流まつり」では小菅村全8地区ごとに郷土食の出店がある。本会の拠点となる古民家があったのは小菅村の中組地区であり、中組地区は手打ちそばの出店であった。5/4の早朝から地区の集会場ですば打ちがあり地元のおばちゃん達が集まる。そこに参加者・大学生スタッフとともに、合流させてもらった。手伝いというよりは体験させてもらう・地域の方との交流をさせてもらう形であったが、本会の関係者は新たなフィールドである小菅村への愛着を深めていく大きなきっかけになったと思う。

地域との交流を進めながら神楽を見学したり、山菜採りなど新緑の小菅村を楽しむ冒険学校となった。「お祭り」というイベントもあるので、参加者の対象も親子参加アリのオープンな受け入れ態勢とした。2022年も主催事業として継続開催することができた。



図2. 冒険学校むらまつりキャンプ



3. 新たな拠点～現在は「清水バンガロー」

「冒険学校むらまつりキャンプ」は前述した「多摩川キャンプ村」ではなく、その後の本会の冒険学校の拠点となる小菅村橋立地区のキャンプ場で開催。オーナーは橋立地区の木下善晴氏である。正式なキャンプ場ではなく、オーナーの趣味もあってキャンプ場風に整備されていた。看板は無い、正式な営業をしている訳で無い、名前も無い。東屋が2棟あり、五右衛門風呂棟がある。電気は通っている。第一印象は、これまでに「子どものための冒険学校」を行っていた大滝村でいうと・・・村コース（中津川村キャンプ場）と川コースの（オ

オガマタ・造林小屋跡）中間ぐらい。普通のキャンプ場と違って貸し切りになるので使いやすい！！という事で、お借りしました。

その後、本会の冒険学校のメインフィールドとして利用させてもらうようになった。冒険学校だけではなく、「理想のキャンプ場づくり」プロジェクトも企画し、ログビルダー養成講座を開催。ログハウスづくりなどを経て、現在は「清水バンガロー」という名称で一般のお客さんも利用するに至っている。



図3. 理想のキャンプ場づくり

4. 夏の冒険学校「こすげ冒険学校」

冬・春を経て、夏の冒険学校の開催を目指した。2005年の夏には「やせいキャンプ」という名称で3泊4日のキャンプ（冒険学校）を開催した。小菅村に拠点を移した当時、「子どものための冒険学校」と同じ従来の6泊7日での開催は難しかった。運営スタッフも世代康太氏、新たなフィールドである小菅村にまだまだ不慣れであったからである。

翌年より「こすげ冒険学校」と名称を変更し、フィールドの整備、プログラムの開発、スタッフの確保とともに日数も毎年少しずつ伸ばし、8年経った2012年より大滝村時代と同様の6泊7日の開催に至った。参加対象は小学校3年生～中学校3年生。定員は20名。

途中、2010～2019年は、「こすげ冒険学校」の終了後に、「冒険学校やまめ・いわなキャンプ」を開催した。親子参加も可能な1泊or2泊で参加形態を選べるキャンプとした。開催の目的は、更なる会員を増やすためであった。スタッフの確保の難しさ、コロナ禍の影響もあり、2020年より開催を見合わせている。

*コロナ禍について

- ・2020年は冒険学校の全ての開催を見合わせた。
- ・2021年の「こすげ冒険学校」より感染対策を実施しての開催とした。

コロナ禍の最中は、スタッフのみによる研修会、感染対策研修会を行い、開催への準備を進めていた。

- ・濃厚接触状態を避けるため、個人用（一人用）テントでの就寝を導入。参加対象を小学校4年生～中学校3年生とした。

5. 「こすげ冒険学校」の考え方

自然文化誌研究会は「冒険学校」の歴史と内容をまとめた「冒険学校のあゆみ」を2015年に発行している。「冒険学校」設立の経緯、各プログラムの詳細、「冒険学校」から展開していった活動を紹介している（「冒険学校のあゆみ」冊子を欲しい方は事務局までご連絡ください）。

まだ本会が小菅村に来る前、1980年代の文章ですが、今も色褪せることのない基本的な考え方として、本会の「冒険学校」の指針となっていますので記載する。

資料集 「冒険学校のあゆみ」より抜粋

1) 基本的な考え方

冒険学校では13年間の歴史の中で、試行錯誤を繰り返し、内容に工夫を凝らしながら活動を継続してきました。その基本的な考え方は子どもたちの自主性を尊重し、行動を促すのではなく、行動を「待つ」という姿勢にありました。これは十分なプログラムを用意しながらも、選択は子どもに任せることです。極端に言えば、子どもは何も選ばず、森の中で一週間昼寝をして暮らしてもよいということでもありました。この考えは、現在の自然文化誌研究会の環境学習活動にも生きています。大まかにまとめると以下の通りです。

- ① 秩父多摩国立公園に隣接した農山村の自然・文化環境の中で、教育的配慮のもとに野外活動を行い、地域の自然・文化遺産を継承するナチュラルリストのジュニアリーダーを育成する。

- ② 安全が確保される限りにおいて、子どもの自主的な活動を尊重し、見守り、援助する。
- ③ プログラム選択の自由を可能な限り拡大する。これには子どもの発案による新しいプログラムを一緒に作ること、プログラムに参加しないで森の中で寝て暮らすことも含む。
- ④ 国立公園内での活動であるので、環境保全のためにロウ・インパクトを心がける。
- ⑤ 環境教育の研究普及活動の一環として、子どもと一緒に新しい自然接触・自然認識の方法を試行する。
- ⑥ 子どもが自然に抱かれて、心身を解き放ち、多くの友達を得て、満ち足りて家庭に帰ることを期待している。
(NPO 法人自然文化誌研究会 H.P. より引用)

2) スタッフからのメッセージ

① 『冒険学校に参加したときに思ったことの一部』

佐伯 順弘 (自然文化誌研究会運営委員) 2018 年執筆、1985 年 冒険探検部入部 現在 岐阜県小学校教諭

■学部生への思い

貴重な夏休みに海外旅行にも行かず、山にも登らず、自転車旅行にも行かずに、1 週間も子どもの安全を見守りつつ過ごす過酷な企画に参加してくれている学部生には頭が下がります。その昔、同じような状況で私は「オレは冒険探検をしに来たのであって、お子様の世話をしに来たのではない。」と少しだけ悲しい気持ちで参加したことを思い出します。ただ、集団に対する食糧計画や調理片付け、食糧損失(残飯、調理残渣)の軽減策、環境への負荷、各個人の体調への影響などについての重要な考察を得られたことは貴重でした。また、意思疎通の大切さや認識不足の相手との交渉などその後の人生においても有意義なことについて考えることができました。

諸般の事情により、そんな冒険学校から随分と長い間離れていたのですが、5、6 年前から再び参加するようになりました。久しぶりに参加した現在の冒険学校はといえば、実に多くの学部生が活躍してくれています。中には、毎回のように参加してくれる人もいて、大変うれしく思っています。その一方で、冒険学校に(奉仕活動という言葉ではなく)「義勇兵」として来てくれている学部生に対して、年長の助言者の立場から何か有用なものを伝えられているのかということをおも

も考えています。というのは、参加者対応が優先されるのは当然であるため、学部生助言者に考え方や技術を伝える時間は思いの外少ないからです。学部生たちは最初から指導者としての判断力や技術を身につけて参加しているのではなく、冒険学校を通して参加者と接しつつ、また先輩担当者との意見交換を通して指導者として自問自答しつつ、その場にふさわしい判断力や指導技術を獲得していきます。ですから、不測の事態が起きた場合、そうでなくても新しい動きが起きた場合、参加者を安全かつ有意義に預かることができるかには不確定な部分が生じてきます。これは決して、学部生の信頼性の問題ではなく、冒険学校として運営側は学部生にどれだけの訓練の機会を提供してきたのかということなのです。

現状では、年長の助言者が全体を観察、統括しており、参加者数も十分把握できる数なので特に問題はないのですが、学部生の訓練の機会があつてこそ、より安全により有意義な冒険ができると思うのです。私自身は野外活動や集団生活技術、集団指導力も身につけてきているので、大抵の事態には対応できると考えていますが、学部生の中には不安を感じている人がいるかもしれません。このような状況でも学部生にはこれからもぜひ冒険学校に参加してほしいと強く思っています。学部生が楽しんで活動することこそ参加者の冒険学校をより充実させるものなのです。それは間違いないのです。

しかし、手放して「子どもと一緒に遊んでくれればいから。」とは言えない部分があるのも確かです。その中であつて学部生には、真摯な観察力と判断力で子どもの命と身体と貴重な体験を守りつつ、自分なりの冒険もしてほしいと願っています。それは、きっと海外旅行や山行とは違った経験につながると思っています。それを確実に実現できるように、私は学部生に少しでも多くの助言をしていきたいと思っています。さらに、少し冒険探検部寄りの野外技術や工作の小技などを伝える機会をつくりたいとも思っています。

いずれにしても、学部生の参加なくしては、冒険学校は成立しません。学部生の参加が少なくても、参加者の安全や充実した冒険を保証することができないのです。助言者が確保できなければ、参加できない子供が増えることにもなります。冒険学校が縛りとなって、自分自身の冒険探検が制限されるようなことがあってはならないのですが、できるだけ多くの学部生に長期の参加を期待

していることも正直な思いです。

冒険学校が小中学生の冒険探検の場であると同時に学部生、社会人にとっても冒険探検、研修の場であってほしいのです。そのために、私たちはこれからの自然文化誌研究会に何ができるのかを考えていかなければなりません。

(※事務局より:この後、検討事項を挙げて戴いてますが、会報掲載のため以下の文書を抜粋)
荒天による避難についての考え方

「避難」とは、まだ余裕がある内に安全なところへ難を避けて移動することであって、どうにもならなくなってから雨の中、暗い中逃げることが「脱出」といいます。ですから、危険が予知できるならば、素早く避難できる態勢をつくっておいて、これ以上は危険だと判断したら素早く避難することが肝要です。後で「たいしたことなかったね。」となっても正解です。難を避けたのですから当然です。「脱出」では多くの損失が出る可能性が高くなります。また、精神的損害も少なくありません。今回(※2018年こすげ冒険学校中の台風13号)は万全の準備ができていたため、全く心配ありませんでした。そういった判断や避難計画、そして決定は数人の対策本部で行いました。その後、全体に対して、こういう意味でこういう判断をしたという説明をすることが良い学びになり、避難するような状況や避難先での適切な行動につながっていきます。

※2017年のこすげ冒険学校の時は「線状降水帯」による大雨で小菅村役場より「避難勧告」が発令。参加者、助言者の全員で小菅村の指定避難場所である「きぼうの館(デイケアセンター)」に避難しています。

② 2012 冒険学校感想文

横山昌佳(自然文化誌研究会運営委員) 2012年執筆

目が覚めるとそこは仮装大会だった。ジャック・スパロウを筆頭に、AVATARがおり、カルシファーがおり、「ラピュタ」のロボットに「魔女の宅急便」のキキに、あれにこれにと、目をパチクリさせて笑い出さずにいられないような、そんな暮れ時の一幕だった。四日の夜。村のお祭に出かける前の出来事で、我らが船長、いや村長たる佐々木のおっちゃんに触発され、皆思い思いの変身を遂げたのだ。それにしても、皆、かわいいたらない。うれしそうたらない。AVATARのたつきは顔が真っ青なので「まさお」と命名されるし、

しんごはカルシファーの団扇をもう一つ作るし、甲斐はロボットの眼鏡(8環)をかけすぎて鼻を痛くした。こんな出来事も、じつに冒険学校の持つ一面だと言いたい。一緒だからやりたいことがある、皆だから楽しいことがある。「キキは黒髪が似合うねえ〜」リボンをつけたあおいちゃんにそう言うと、彼女はくるっとこちらを向いて、「ショートカットっていうんだよ!!」・・・笑った。

今回のキャンプは、子供が9人、スタッフが常に10人足らずと、じつに少人数のキャンプだった。夜も更ければすぐ 囲炉裏に3~4人になって寂しいけれど、でも、だからこそ一人ひとりとの時間は長く丁寧になる。たつきと道路に寝転がって空を見たり、リュージの長風呂に延々と付き合ったり、「みんなには内緒だよ」と誘われて大地やひなたとカブトムシ用の桃を仕掛けに行ったりと、ゆっくりビールを飲む時間もないほどだった(飲んでいたけど)。そんな中で、誰に話しても「そうだよねえ」と頷き合ったのが、さくらの大人びた様子。小学校6年生の彼女はいつの間にやらずいぶん大きくなって、男性陣のゲツを蹴飛ばしてきたやんちゃ、、、はどこへやら、すっかりお姉さんの顔をしていた。ゆりあやみれいの世話をしたり、そうでなければぽつんと椅子に座って、みんなを見ながら何やらブツブツつぶやいたり。彼女も来年はもう中学生。もっとゆっくり大人になればいいのに。……そして、ゆりあ。5歳の彼女は小さくて、でもすごく元気でかわいくて、ああ、もし自分の子だったら100パーセント甘やかしちゃうだろう、と思うような、そんなワガママですてきな姫君だった。この子がまた、よく歩く。よく走る。よく話す。ついて行くこちらはへとへとになるのだけれど、言うことを聞かなくても、ソッポを向かれても、「まーしーのせいで、まーしーのせいで!」とわめかれても、頬はゆるみ目はやに下がって、「そうかあ」とか、「ごめんね」とか、「仕方ないなあ」とか、いうだけ。

ところで、最後に一つ、スタッフのすてきな涙を紹介しておしまいにしたい。名前はちあき。サークル「ちえのわ」の二年生で、その中では最も長く、三泊四日の日程だった。女の子のスタッフが少ない中で彼女はじつに貴重な存在で、4日に帰ると思っていた彼女が5日までいる、と分かったときには拍手喝さい、スタッフ一同諸手を挙げて喜んだ。女の子たちの面倒をよく見てく

れて、滝にも飛び込み——いや、雫さんに突き落とされ——、「今回の MVP」と黒ちゃんにいわしめるほどだった。時間の長さではなく、愛する一瞬がその理解を生むのだとロマン・ロランは書いたけれど、しかし、量が質に転化するというのもまた、普遍的な命題の一つである。だから、一泊二日の short trip ではなく、幾度も寝食を共にした彼女だからこそ、感じるどころがあったのだろう。夜、佐々木のおちゃんが「かなしいお知らせがあります」と皆にちあきの帰りを告げたとき、皆ええええーと声を上げ、ふと、ちあきがうつむくを見て、あ、と気付いた。泣くんだ。ちあきは泣いているんだ。それはすぐ皆の知れるところになって、からかいつつ、慰めつつ、囲炉裏端で皆はしゃぎ回った。はるちゃんが、「しんご、何か一言」と求めると、しんごは両手に持ったカルシファーをちあきに近づけ、「ばあー」といって、皆を笑わせた。その涙が一つの総括。

③ 『2016 年度 こすげ冒険学校 後記』

こすげ冒険学校 村長 雫 永法 2016 年執筆

今年の冒険学校が終了しました。参加者 17 名、スタッフ 29 名（延べ人数）の体制でした。今年は 5 年生までが 13 人で 6 年生以上が少なく、どんな冒険学校になるかな・・・と思っていたのですが、いざ始めてみるとそれは杞憂だったということがわかりました。

今年は人が野外活動をする中でどのようなことに興味を持って生活共同体になっていくのかということが顕著にあらわれたように感じます。まずリピーターである子どもたちが自分たちからどンドンと動き出しました。心の中に溜め込んできた色々な思いがあったのでしょうか。

キャンプ前半のブームは焚き火でした。ちょうど子どもたちが鉋（なた）で加工しやすい板材がありました。焚き火にちょうど良い細さに割っていくのが面白らしく、交代で細い薪づくりを楽しんでいました。人が本当に楽しんでいる姿を目の当たりにすると自分もやってみたくなるものです。初参加の子どもも自分から「やらせて」と声を発し、はじめは恐る恐る、そして次第にスムーズに鉋を扱えるようになっていました。

「薪をもっとお願い!」「うん、わかった!」そんなやりとりを交わしながら、しばらくすると頼もしい薪職人が何人も生まれていました。勿論、適時スタッフが声を掛けて安全に扱えるように

指導はしましたが。そして、あっという間にキャンプ場の中に小さな焚き火がそこかしこに出来上がっていきました。

同じ火を囲み、見つめながら一心にあおいでいる子どもたち。それぞれ興味を抱くポイントに違いがありました。どうやったらうまく燃えてくれるのかということを繰り返し確かめる人、杉葉の燃え上がる瞬間（油分が多いために多量の煙に一気に着火する）を追い求める人、細い枝をつぎ足しながら小さな火の揺らぎを楽しんでいる人…。材を集めたり、作ったり、運んだりしながら徐々に徒党を組んで同じたき火を囲む。興味は異なっても、焚き火によって人がつながっていく様子がよく見えた時間でした。

今年の冒険学校も二日目辺りから子どもたち同士の距離が急速に近くなっていく様子が見られました。それは、薪作りや焚き火だけでなく、沢遊びと五右衛門風呂（沢の水は冷たく体が冷えてしまうのでお風呂で暖をとってからまた沢で遊ぶ）、キャンプ場を出て下流の浅瀬でカジカ（清流に生息する魚）突き、それぞれが自分の寝床をつくって満天の星空を眺めながら雑魚寝等、子どもたち同士が場所と時間を共にしながら自然を楽しむ機会が目白押しだったからでしょう。また、食事一緒に食べるということも大きく関係していたのかもしれませんが。

大人は大人で好きなことをしていたということも大切だなと感じます。もちろん、子どもが命に関わるような危険なことをしていないかどうかということを見極めつつ見守りながら、一方で自分が面白いと思うことをしているのです。豪快に薪割りを楽しむ大人。偶然に目の前に現れた昆虫の写真を撮り図鑑で種類を特定し大喜びする大人。ハンモックを持ち出して昼寝を楽しむ大人。黙々と木を削って何かを作っている大人……。大人が自由な発想で思い思いに楽しんでいると、子どもは子どもで自由に動き始めるのです。

この大人も子どもも関係ないゆつたりと自由な雰囲気は冒険学校の魅力なのかもしれません。今年はテントを抜け出してログの柱とブルーシートを利用して屋根を張り、荷物を運び込んでいた子どもたちが現れました。『おっ、面白そうだな〜』と遠巻きに見ていると中で何やらごそごそと作業しています。どうやら自分たちだけの寝床？を設営しているようでした。子どもたちは「ここ、俺たちの部屋。な〜。」「な〜。」と目を合わせて自慢気に教えてくれました。

大人からするとシートを上に乗っただけのただのスペースに見えるのですが、子どもにとっては極上のプライベートルーム。食事もそこへ持ち込み、とても満足そうに利用していたり、ヒソヒソと楽し気に談笑していたり。子どもたちには子どもたちの世界があるのだと改めて感じました。・・・二日もすると此処は何かの動物の巣かと思うような様相を呈してくるのですが・・・これもまた冒険学校の醍醐味。後片付けも自己責任。

話が逸れましたが、このプライベート空間で子ども同士のトラブルが起きました。それぞれの言い分や要望をお互いに受け入れられずの喧嘩。大人は、一応話は聞かすがそれ以上は関知せずそれぞれに任せていました。しばらくは冷戦状態が続いていたようですが、時間の経過と共に解決の方向を見つけたようでまた笑顔で遊んでいる様子が見られました。

冒険学校に参加する子どもたちは出身も様々です。年齢も生活地域も違います。豊かな自然環境の中でゆったりと自分を出し合い、時にはぶつかり合いも経た上で受け入れ合って共に生活を創りあげていきます。ある意味、文化交流の場なのだと思いました。

そして、『小菅村の自然の中で楽しみを見つけ』ながら『他者と共に生きていくとはどういうことなのか』を学び合う場でもあるということ、この何気ない寝床作りという出来事から改めて感じました。

④ 『やまめ・いわなキャンプを終えて』

やまめ・いわなキャンプ 村長 鈴木英雄 2016年執筆

キャンプをやるたびに、終わるとああ、いいキャンプだったな、といつも思います。今年もまた実に穏やかな充実した時間を過ごさせていただきました。参加された皆さんならびにスタッフの皆さんに感謝申し上げます。

やまめ・いわなキャンプは、夏の冒険学校が終わって数日後に一泊二日の2連続で開催されます。1泊だけの参加でもいいし、2泊してもよいことになっています。また他のキャンプと違って親子参加を推奨していて、大人の参加が認められています。もちろん子供だけで参加してくれる方もいます。冒険学校は1週間ありますから、長すぎて参加できない子供たちの受け皿にもなっています。

実は数年前にあまりに参加者が少なすぎて、昨

年はついにこのやまめ・いわなキャンプの存続を議論するまでになっていました。そんななか昨年参加されたのは3組の親子6名と子供だけの参加1名の7名という少ない人数でキャンプが始まりました。始めてみるとそのキャンプも実に充実したいいいキャンプで、特に大人の皆さんが帰りたくないと言ってくださって、キャンプを開催する側の人間にとって、こんなうれしい言葉はありません。この言葉のおかげでキャンプ存続の議論は霧消し、今年も同じように開催されました。

やまめ・いわなキャンプの参加者は大人がいるので、幼児の参加も認められています。したがって参加している子供たちの年齢層がかなり低めです。今年は4組の親子14名と子供だけの参加者4名の計18名でキャンプが始まりました。そのうち就学前の幼児は5名いました。参加者の顔ぶれは子供たちだけのキャンプとは全く様相が異なります。スタッフも一週間前の冒険学校とは入れ替わります。スタッフの役割も少し変わって、親から離れない子供たちをいかに子供たちだけで遊ばせるかがスタッフの使命です。それは容易ではなくキャンプが終わる頃になってやっと、ということがほとんどです。しかし子供たちにとっては、親からの自立だけでなく、親との絆を深める絶好のイベントでありますから、スタッフとしても場面に応じて子供たちとの接し方を考えていきます。大人の皆さんには、せっかくのキャンプですから、子供たちが少々羽目を外してもできるだけ怒らないように、とお願いしています。また、子供たちのためを思って参加を決めたと思うのですが、キャンプ中は子供たちのためを半分くらいにして、あとの半分は是非、自分のためを考えて楽しんでくださいとも言います。キャンプは楽しくなければいけません。最後まで笑顔で過ごしてもらいたいと思います。

Mさんご一家は、就学前のお子さんご両親の3人で参加されました。はずかしがりやのお子さんでしたが、すぐにほかの子供たちと仲良しになりました。4家族の中で唯一1泊でお帰りのため、みんなに見送られての別れとなりましたが、帰りたくないという気持ちとそれでも帰らなければならないという葛藤が見て取れました。ご両親はおさんが納得できるまで待ち続けました。帰りの車の中でいいキャンプだったとおっしゃってくださいました。Yさんご一家は、転勤で10月には青森に引っ越すという状況の中、最後の東京での夏は、家族でキャンプをすることにしてい

ました。私たちのキャンプを選んでくれて、こんなうれしいことはありません。Yさんも1泊の予定でしたが、子供たちの様子を見て、2泊に延長されました。何度もいい経験をさせてもらってありがとうございました。Tさんはお子さんとおとうさんと参加されました。おさんはなにかにつけパパ、パパと呼んでいて、仲のよい親子です。おとうさんはこのキャンプがご自分の仕事に生かせないかといつも思案していました。仕事人間の悪い癖です。Sさん一家は、常連さんです。キャンプ中の過ごし方も楽しみ方もよくご存じです。昨年も参加されていて、このやまめ・いわなキャンプは、今後も続けていかなければと思わせてくれたご家族です。

私たちスタッフはボランティアです。しかし参加者の皆さんにお金を払ってもらってキャンプをやるわけですから、意味あるキャンプ場での生活を提供しなければなりません。無償で手伝うのだからこの程度でいいや、とは到底思っておりません。だからといって小難しい議論で自分たちを縛るのもほどほどにしなければなりません。ただただ、楽しかったです。私たちにとってもいいキャンプでした。すばらしい時間を過ごさせてもらった皆さんに改めて感謝申し上げます。来年もお会いできることを楽しみにしています。

⑤ こすげ冒険学校後記

自然文化誌研究会 雫永法 2021年執筆

今年の冒険学校も中止せざるをえないのではないかな…そんな不安と諦めの気持ちを抱えながらの年度スタートだった。

しかし、5月には佐伯さん、贄田さん(だにえる)、学生のまとめ役をしてきている宮坂さん(みややん)が中心となり、安全にキャンプを開催するための感染症対策実地検証キャンプを実行した。検証結果は、しっかりと準備すれば可能なのではないかということ。私は参加することができなかったが大きな勇気をいただいた。

ZOOM会議にて一人用テントの発注、スタッフの事前PCR検査事項、開催規模、参加者の生活動線の想定をしながらの感染リスクを最大限に避けるための工夫、発熱者が出た場合の対応、参加者・家族・スタッフへの連絡、現地までの移動方法など様々な事柄について意見を出し合い準備を進めた。

東京都の緊急事態宣言下での開催は最後まで実施決定判断を待ったが、慎重に準備を進め実施

することができたのは望外の喜びだった。それは自然のフィールドに身を置いた子どもたちの目の輝きや活動の様子、子どもたちとの接触の機会を奪われてきた学生スタッフの生き生きとした生活ぶりを目の当たりにできたからだ。

例年だと冒険学校中に夜更かしをして発熱等軽度の体調不良になる子どもがいるが、今年は本当に自己体調管理の意識が高かった。発熱者無し。小菅村の自然を全身で楽しみ、よく食べ、よく休み、参加者同士またスタッフとのコミュニケーションをしっかりと取れていた。連帯意識も日に日に深まっているように感じた。

晴天下で沢遊びを満喫し、体が冷えたら五右衛門・ドラム缶風呂の温かさを味わうという贅沢ループ。地元で採取してきた真竹を使った竹細工・木工作活動も充実していた。火の扱い(火遊び?)や薪割りを存分に楽しみ、火の職人が何人も誕生した。雨天での生活も経験できた。雨の日なのに手づくりプラネタリウム。スタッフを丁重にご案内差し上げて小菅生活ゆかりの星座内覧会を楽しんでいた。満天の星空・ナイトハイク・いろいろな生きものとの出遭いも貴重な時だったのではないだろうか。あんなに立派なガマガエルたちをあれ程愛おしむ人たちに会ったことはない。

かくして、2021年度の冒険学校を無事終了することができた。各ご家庭でも様々な準備・配慮があったらろうと想像する。参加者・スタッフの異無く関係者全ての方々に感謝したい。

カリキュラムが変わりスケジュール調整が難しい中喜んで参加をし、子どもたちとの生活を楽しんでくれた学生の方々には特別のねぎらいの思いを伝えたい。また、子どもたち・学生スタッフの安全と安心のために絶えず様々な助言や下支えをしてくれた自然文化誌研究会のメンバーに感謝を伝えて後記を締めくくりたい。

⑥ 2022年のふりかえり

福嶋亜依さん(東京学芸大学1回生)

全ての時間が楽しかったです。純粋に楽しいという気持ちが溢れ出て、帰ってから思い出話が止まりませんでした。

私は主に工作班として携わらせていただきましたが、沢山の子どもたちが粘土や竹、金属などの素材に触れ合って楽しそうに、思うがままに工作している姿を見てとても嬉しくなりました。それぞれのこだわりを持って作った作品はどれも素晴らしかったです。子供たちと、ここはどうし

たら上手くいくか、もっとかっよくなるかを一緒に考えて考えながら楽しく工作することが出来ました。

ナイトハイクもほぼフル参加でき、小菅の様々な場所を子供たちと探検できたのも良い思い出になりました。冬のヘリポートからの星も見てみたいです。

7月のキャンプもちろん楽しかったですが、今回のキャンプでは更に沢山の人たちとお話したり関わり合いながら過ごすことができたこと、本当に本当に楽しかったです！！ありがとうございました。



図4. 工作班の活動

豊島大史さん（東京学芸大学2回生）

今回、冒険学校に参加して、子どもとの関わり方と新たな課題に気づけたキャンプになりました。ゴールデンウィークが初めてキャンプでしたが、その時はどこかお客さまのような気分でした。仕事や子どもたちとの関わり方など、どうしたら良いのか分からず、戸惑っていた記憶があります。そこでの悔しさを糧にしながら、農学校や校外活動を経て、冒険学校に臨みました。子どもたちと仲良くなるためには、子どもたちの話すことに興味を持つことだと思いました。子ども一

人ひとり好きなことや関心のある分野があり、私はそれを聞くことがとても好きです。今回は、昆虫や星座、国、結晶、ライフハックまで、子どもたちからたくさん学びました。私にとって初耳なことばかりで、同じキャンプ場なのに、毎回新しさを感じることができました。子ども同士で協力し合ってる場面もあり、すごく感動しました。そのような場面が増やせるように、今後のキャンプで工夫していきたいです。

森岡小晴さん（東京学芸大学3回生）

今回も、スタッフでありながら、私自身が子供たちと一緒に新たなことを探しては全力で挑戦していく学びの多い本当に楽しい時間でした。周りに広がる 木々、植物、川といった自然、竹、糸、ノコギリなど、工作道具が贅沢に揃っている環境で、何ができるかなと考え試行錯誤する楽しさ、普段なら時間の経ちを気にしながら過ごす1日を、何も気にせず自由に使える喜び。都内の小学校を見ているからこそ思う、これらのことの難しさと贅沢さ。この環境を作り上げた、黒ちゃん、しずくさん、はるちゃん、鈴木さん、みどりさん、みややんさん…沢山の小菅における先輩の方から、この環境を作るにあたっての経緯や、大切にしていることをもっとお話をお聞きしたいと思いました。（既に沢山聞かせてもらっていますが！）また、私もこの空間をこれからも継承していきたいし、私が教員になった時にも大切にしたいし、子供に是非感じてほしいと、改めて思った冒険学校でした。

小菌美優さん（東京学芸大学4回生）

笛を吹いてみた経験が記憶に残っている。簡単そうに見えて技術が必要なことに気づき、世界が広がった感じがした。冒険学校は、それぞれが好きにやっているからこそ、それぞれの世界を少し覗けたような気がした。そういう幅の広さも、冒険学校の大きな魅力だと感じている。



図5. 子どもたちが積極的に火で遊び、風呂沸かしなどの生活に活かす。



図6. 冒険探検部恒例のシシカバブを。シシカバブ導入者の佐伯順弘氏が披露。右は、小集団行動にて1泊を終えてキャンプ場に戻ってきた。



図7. 清水バンガローオーナー木下善晴氏の炭焼き窯

⑦ 2022年度こすげ冒険学校後記

こすげ冒険学校村長 雫永法（しずくながのり）
今年の冒険学校は何と恵まれていただろうか
と思う。活動内容の充実ぶりについては参加した

子どもたちや学生スタッフの感想からも分かる
通りだ。ここでは別の観点で報告できればと考
えている。

まずは子どもたちの様子についてお伝えした

い。今年も新たなメンバーが加わったがどの子ども非常に好奇心旺盛で、初めて過ごすキャンプ場では出会うあらゆる物事に興味を持ち自分で試してみなければ気が済まない面々が集っていた。良い意味で“ギラギラ”していた。初日、新メンバーだけの様子を見ているとかなりハイペースな活動で、このままいくと一週間もたないのではないかと心配になる程だった。

しかしもう一方で、冒険学校経験者が何人も参加していて冒険学校の生活リズムをリードしてくれていた。久しぶりのフィールドに身を置き、自然いっぱいの空気を懐かしむように味わい、キャンプ場の様子をたしかめながら、ゆったりと活動していた。これからのキャンプ生活をじっくり味わっていかうとでもいうような余裕のある雰囲気を感じられた。この経験者たちの行動は理に適っていて経験に裏打ちされた根拠があるため新メンバーたちも次第に真似たり後について回るようになってきたりして、自然にキャンプの生活リズムや雰囲気が出来上がっていった。結果、子どもたち同士の関係も日を追うごとにバランスよく深まっていった。そして、子どもたちはその関係性の中で次から次へと楽しみや喜びを見つけ味わっていた。

次に学生スタッフについてお伝えしたい。いまだ続くコロナ禍にあってもそれぞれが備え、想いをもって参加してくれた。

今年は7月初旬に東京学芸大学『サークルちえのわ』の学生を中心に他大の学生も小菅村に集まり、事前スタッフ研修会を行うことができた。沢遊びや沢登りをしつつフィールド探索をして土地勘を養ったり、薪割りや五右衛門・ドラム缶風呂焚き等の技術を身に付けたり、このフィールド内で考えられる危険の予測や対策といった安全管理についても学ぶ機会を持つことができた。学生同士の信頼関係も深まり、互いに安心して支え合うことのできる状態で冒険学校本番を迎えることが出来たということが何よりも心強かった。このような積み重ねがあったからこそ学生が子どもたちとの関係を豊かにつくっていくことが出来たと思う。さらに事前準備や後日帰り（事後片付け）に参加してくれた人が何人もいたことは本当に嬉しかった。怒涛のようなキャンプ期間を過ごした後の静けさを充実感と共に味わう…という格別の時間を過ごすことが出来たことも嬉しかった。今年の冒険学校も学生たちの情熱や人知れない助力に支えられ無事に実施することが出来たと感じる。感謝したい。

⑧ こすげ冒険学校のプログラム 年々、少しずつの変化あり。

2014年

日付	主なプログラム
7/31	テント立て、キャンプ場案内、夕食作り（カレー）、虫捕り
8/1	薪割り、そば打ち、川遊び、木工、ダム作り、川遊び、夕食作り（から揚げ）、花づくり、虫捕り
8/2	カジカ捕り、つり、川遊び、仮装、夕食作り（煮込みハンバーグ）、お祭り、虫捕り
8/3	カジカ捕り、つり、うどん作り、白糸飛び込み、夕食作り（肉じゃが）
8/4	沢登り、コンニャクづくり、手づかみ漁、夕食作り（ハヤシライス）、星空
8/5	カジカ捕り、雄滝、白糸の滝、川遊び、小菅の湯、夕食作り（麻婆茄子）、全体会、花火、星空
8/6	片付け、大掃除

